

(様式1)

## 「未来の担い手育成プログラム研究校」実績報告書(2年次)

### 1 学校名等

学 校 名	宇治市立黄檗中学校				校長名	市橋 公也	
研究教科・領域等	総合的な学習の時間及び全教科						
研 究 主 題	主体的・対話的で深い学びの追究 ～「正解のない問い」に対する解決策を主体的・協同的に探究する生徒の育成～						
研究の目的	課題解決型学習 (Project-Based Learning) を通して認知能力・非認知能力を一体的に育成する。						
学 年	1年	2年	3年	特別支援	合 計	教職員数 ※校長・教頭を含む	
学 級 数	3	3	3	2	11	25	
児童生徒数	114	118	106	9	347		

### 2 研究校の概要

本校は、平成24年度に開校した施設一体型小中一貫校で、今年度の児童生徒数は小学校753名、中学校347名、合計1100名である。

#### 【認知能力】

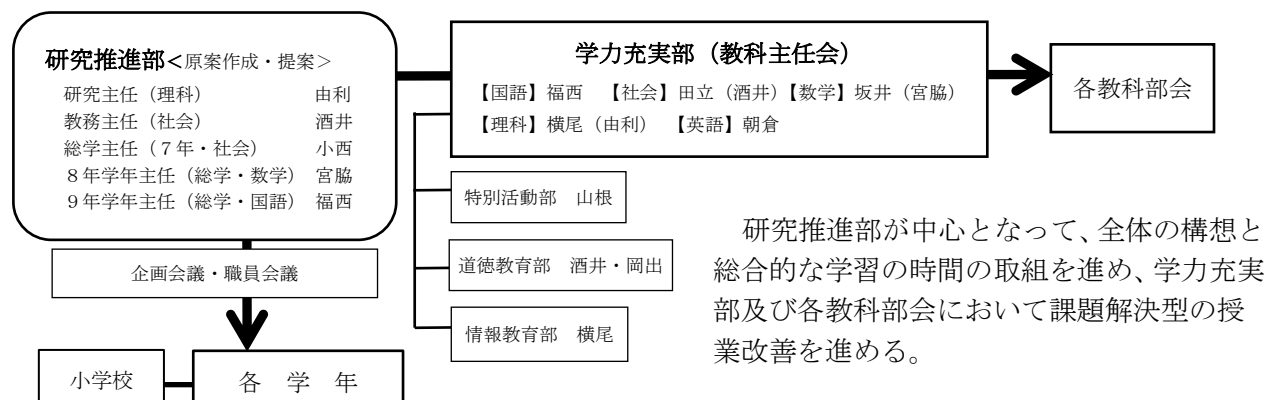
令和元年度までの全国学力・学習状況調査や京都府学力診断テストの結果は、どの教科も全国・府平均と同程度か、若干下回る程度であった。国語と英語においては、「読むこと」の領域に課題が見られた。

令和元年度と2年度に全学年でリーディングスキルテストを実施し、認知能力の伸びについて経年比較したところ、2年生、3年生ともに、前年度と比べて偏差値の伸びが見られた。

#### 【非認知能力】

異学年の交流が自然な形で行われ、小中の9年間を同一集団で過ごすことで、他者理解が進み、生徒は中学生になっても子どもらしい素直さや優しさを持ち、男女の仲もよく、誰とでも抵抗なくコミュニケーションを図ったり協働したり自分の考えを表現したりすることができる。一方、昨年度までの全国学力・学習状況調査や京都府学力診断テストの質問紙調査の結果を見ると、特に「自ら課題を解決する姿勢」や「自主的、自律的、計画的に学習に取り組む力」に課題が見られ、その他の質問項目においても、肯定的に答える生徒の割合が全国、府と比べて低い傾向が見られた。

#### 【研究体制】



### 3 主な研究活動

#### (1) 「総合的な学習の時間」を中心とする課題解決型学習の推進（通年）



3年 宇治市への提言



2年 未来の宇治創造プロジェクト



1年 防災プロジェクト

#### (2) 各教科における、単元のまとめり・社会とのつながりを意識した授業と評価の改善（通年）



3年 理科



1年 理科



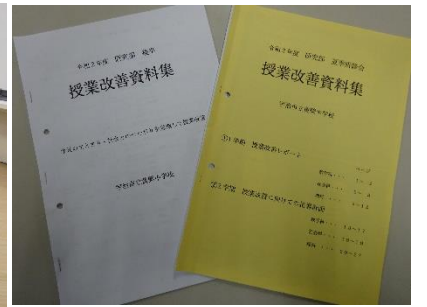
1年・3年 合同 理科



1年 社会



2年 家庭



全教員PBL授業改善レポート

#### (3) プレゼンテーションに係るルーブリック「スキルUPシート」の作成

課題解決型学習(PBL)プレゼンテーション		宇治市立興業中学校			
『スキルUPシート』		到達目標			
プロセス		C	B	A	備考
1	伝える 伝わりやすい内容となっているか	聞き手を意識して伝えることが不十分である。 ツールの活用に課題がある。	聞き手を意識して伝えている。 ツールを有効に活用している。	十分に聞き手を意識して伝えている。 ツールを十分有効に活用している。	内容や表現 ツール・ICT機器や図、表、グラフ、写真など
2	調べる 事実を調べられているか	調査が不十分である。 ターゲットの特定が不十分である。	調査できている。 ターゲットが特定できている。	十分調査できている。 ターゲットが十分特定できている。	
3	考える 課題の特定ができていないか	課題が明確でない。	課題が明確である。	課題が十分明確である。	調べること、考えることがはっきりしている。
4	まとめる 課題解決に向けた課題となっているか	実現可能性が低く、その原因が特定できていない。 これまでの教科等の学びを十分活かすことができていない。	実現可能な提案である。 これまでの教科等の学びを活かすことができている。	十分に実現可能な提案である。 これまでの教科等の学びを十分活かすことができている。	
5	深める 検証を行っているか	提案の理由が明確でない。	提案の理由が明確である。	提案の理由が十分明確である。	データや研究結果、証拠を示している
6	交わる チームで取り組んでいるか	十分協力ができていない。	協力している。	十分協力している。	

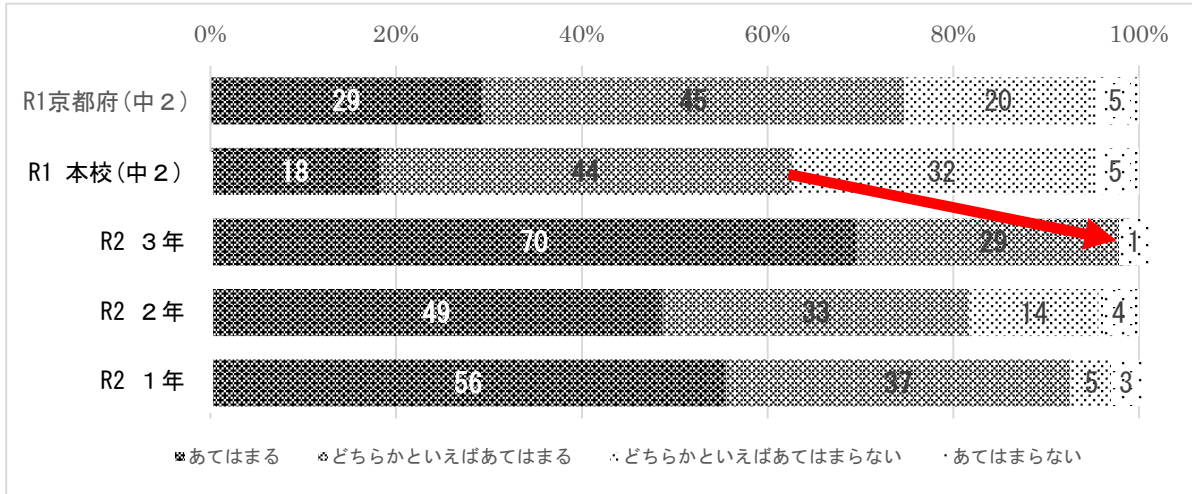
※これ以外にも、聞き手側として伝える側の考えをつかもうと意識して聞くことも大切である。

- (4) リーディングスキルテストの実施による認知能力育成の検証（7月）と  
質問紙調査による非認知能力育成の検証（12月）



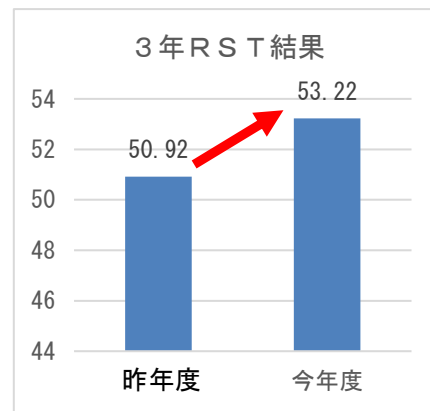
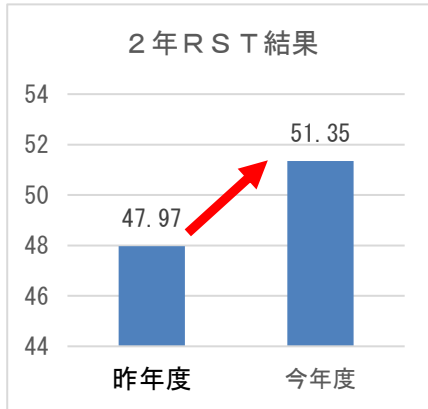
#### 4 今年度の研究の成果と検証

- (1) 「課題解決型の学習に取り組んでいる」という生徒の意識の高揚  
「授業では自分（たち）で課題を立てて（提示された課題について）、その解決に向け情報を集め整理して発表するなどの学習活動に取り組んでいると思いますか。」という質問に肯定的に答える生徒の割合が大きく増加した。



- (2) 基礎的な読解力・論理的思考力の育成

令和元年度と2年度、全学年でリーディングスキルテストを実施し、2年生、3年生とも、昨年度の結果と比較して、成績の伸びが見られた。



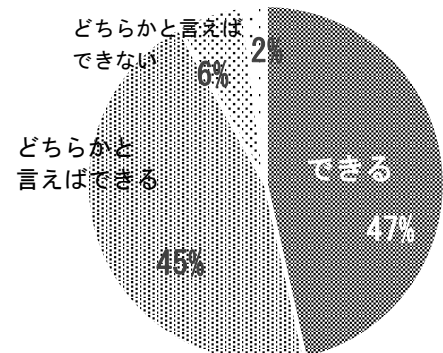
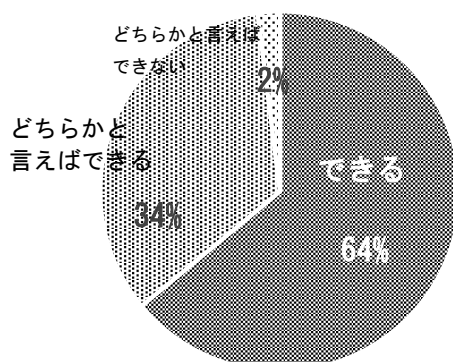
(全国の中1～中3生徒を母集団とする結果の偏差値)

- (3) ICT活用能力の向上 <3年生への質問紙調査の結果>

◆授業でのコンピューターの使用頻度が「ほぼ毎日」「週1回以上」と答えた生徒の割合が増加  
【令和元年度】8% → 【令和2年度】76%

◆コンピューターを活用した情報収集が「できる」生徒の割合が増加

◆コンピューターを活用したプレゼンのための視覚資料作成が「できる」生徒の割合が増加



(4) 学力向上の指標となる質問に肯定的に答える生徒の割合の増加

< 3年生への質問紙調査結果 >

【令和元年度】【令和2年度】

◆自分の考えが伝わるよう工夫して発表している。	54%	➡	81%
◆地域の自然や歴史に関心がある。	34%	➡	68%
◆地域や社会をよくするために何をすべきか考える。	27%	➡	69%
◆学ぶことや働くことの意味について考えている。	59%	➡	73%
◆学校で取り組んでいることと自分の将来とのつながりを考えている。	57%	➡	72%
◆家で計画を立てて勉強している。	42%	➡	65%

5 今年度の課題

(1) 課題解決型学習に繋がる授業改善について

○課題解決に向けての当事者意識を高めること、より思考を深めさせ、発想を広げさせることが課題である。そのために指導者のファシリテーション能力、課題設定の力、課題を分析したり、問いを組立てたりする力を高める必要がある。

○インターネット検索で得られる情報のみを基に発想するのではなく、実体験や実際に人と関わることを大切にしながら、様々な情報を収集し、自分の頭で判断・処理し、表現・発信・伝達につなげさせる。

○他の研究指定校の研究成果も参考にしていく。

(2) 認知能力と非認知能力の一体的な育成と論理的思考力の育成について

○非認知能力の評価指標が設定しきれていない。質問紙調査により、非認知能力の評価を試みているが、PBLの実施と非認知能力育成との繋がりを明確にするのが難しい。

○今年度作成した「スキルUPシート」（プレゼンテーションに係るルーブリック）を有効に活用し、自己評価や生徒同士の評価を非認知能力の育成に活かす。

○令和元年度、令和2年度は、RSTを1学期の早い段階で実施したため、令和2年度の認知能力の伸びが年度内に測定できていない。研究最終年度である令和3年度は、2・3年生のRSTを年度後半に実施し、最終的な認知能力・論理的思考力の伸びを測定する。なお、1年生については、年度当初に実施し、2・3年生の中学校入学当初の学力と比較する。

6 3年次の研究構想

研究最終年度であり、新学習指導要領全面実施の年でもある。各教科・領域において、研究指定終了後も継続して課題解決型学習の手法を活かし、単元や内容のまとまりごとに目標とする資質・能力を育成することができるよう、授業改善と評価の改善をさらに進める。

(1) きょうと明日へのチャレンジコンテスト

連携企業の出前授業を活用し、企業の持つ視点を最大限生かし、生徒の当事者意識を高め、社会で必要となる資質・能力を育む。

(2) 宇治学（総合的な学習の時間）における課題解決型学習

	ビジョン（目的）	ゴール（目標）
1年	宇治の減災	・企画提案書をつくり、宇治市等関係機関に提案
2年	世界に日本茶を広める	・世界に日本茶を普及させるための提案をチャレンジコンテストで発表
3年	将来住みやすい宇治をつくる	・各分野の企画提案書をつくり、宇治市等関係機関に提案

(3) 各教科・領域における指導の工夫改善

各教科・領域において、単元や内容のまとまりごとに課題を解決する学習や社会とのつながりを感じさせる学習を一層推進し、単元ごとの多様なテストを充実させて、指導と評価の一体化を図る。

(4) 情報活用能力（ICT活用能力を含む）の育成

1人1台のタブレット端末を有効に活用し、ICTの基本的な操作スキルを含め、情報活用能力を身に付けさせる。

(5) 本事業取組の最終成果検証